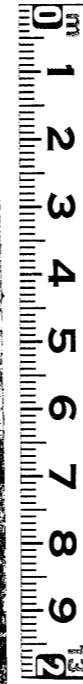


仰望節録卷一全

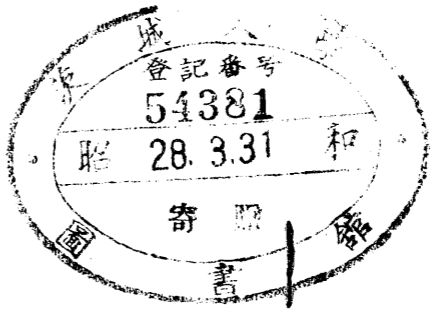


289.1
1

タイトル番号：0076

書名：仰望節録

2冊



仰望節録序

侍醫曾昌道之寛政ノ比ニ在リ時ありて我
南山老公ノ所側ニ侍甲乙申所於々々ノ所字をよ
史ノ載侍らぬ所徳儀ノ事一條々といつ
かよき一はくまきこのまつみたることさるまつしつ
公ノ神のあら火ノ事むりしと形りぬおしむる
昌道と云れたるの事んやい申昌道櫻田郎中ノ
より廬ニ住る 公務ノ免すよむしつ 志をさし
事ノよむるよむる胸よむる事と云ふ

○梨補

のまじりて一まじりていふまじりて侍臣某とまじりて
見事本お付へていふまじりてあわだてられははらたれ
竟お櫻本お入りて遠まじりていふまじりてあまの友お
老公の御めまじりて示まじりていふまじりてあまの友お
公おつゝいふ道いふまじりていふまじりていふまじりて
史の筆おいふまじりていふまじりていふまじりて

天保三年みつへの辰乃常夏月

薩摩侍臣早川兼典

序

人の節ヒキをかくふ誠心誠意をねとひをかたひ竹いふい
ふが如く是其つものまじり

三位老公はやくよで 封内お治め其民を憫之固本の
業お勧るを 昔となし玉ふこといとも篤けきバ臣庶

を固より村童らにいふまで仰る拜を依所なり 臣ヒキ槃の
おとたも其博愛潛徳を仰望をること 五十年お僅チカく偶見

警観をることお志るし待けおがいつしお疾を積たり
さるを丁丑の火おうせおけお頃間 官暇をえくはら其

胸記と舊聞を矯志るして裔孫のお示さんとせしを

序

公の侍従の臣某こきを瀏覽して木ふ忍り不朽ふとむ
づしときくえあひけたまふ内史の老臣ふばかり績文
此拙を醜と售に扱さくら木につけて 封内の舊識ふと
わくらバやとて於ん

天保三年夏五月

臣曾繁識

仰望節録上卷

目次

提要 第一條

俗語考の起草 第二條

造士館演武館犬追物場を創建 第三條

於篤君誕 第四條

虎壽麻呂公誕 第五條

明時館創建 第六條

新小龍門橋新建る記 第七條

窮民を救 第八條

目錄

質問本草 第九條 書牘序文付

神鏡と獲玉ふ記事 第十條 神廟記付

隱館此地とト玉ふ 第十一條

再韓種人參圃取つくる 第十二條

成形實録改撰 第十三條

種藥此園とト玉ふ 第十四條

博植 第十五條

獨樂園 第十六條

靈芝と採 第十七條

龜岡十勝の詩 第十八條

榮宗千眼寺と創建 第十九條

德昭殿と創建 第二十條

日本史島津傳末 御家系補入 第二十一條

種茶 第二十二條

狐妖の人ふ憑るを避玉ふ 第二十三條

古冢を祭る記 第二十四條

尚齒會 第二十五條

馴鷹取賜 第二十六條

防災 第二十七條

尊齡八十初度 第二十八條

塵禽冢_成建 第二十九條

神蛇の記 第三十條

聚珍寶庫の碑文 第三十一條

藩府の街名を改む 第三十二條

郭註莊子_成和釋を 第三十三條

鳥名便覽鏤版 第三十四條

仙禽雙雛の記 第三十五條

昇位 第三十六條

馴鷹を賜 第三十七條

有氣_{ウキ}の辰_チふ中らせ玉_{タマ}ふ 第三十八條

額陰の記 第三十九條

福壽亭_成碑文 第四十條

新小瑤光精社を建 第四十一條

地を掘て古銅器_成獲たり 第四十二條

福壽亭落成を 第四十三條

尊齡八十八の初度 第四十四條

敏書 第四十五條

神佛一扁額を奉建し玉ふ 第四十六條

天明年來_成登城 第四十七條追加

強記 第四十八條

仰望節錄

福壽亭梨木

臣曾擘謹纂輯

提要第一條

重豪公初久方忠洪○善次郎○又三郎○從四位下左近衛
少將○薩摩守從四位上左近衛中將○上總介○榮翁史館
日錄

延享二年乙丑十一月六日薩藩子生不母は島津備前貴傳
女史館御父君は島津久徳公なり

初重年為兵庫久季養子及宗信逝去無後重年襲封是以重
豪亦為久季之後寶曆三年癸酉十二月十五日元服號兵庫

第一條

久方父重年加冠新納内藏久品理髮

同四年重年携久方朝江都於是復稱善次郎八月四日重年達世子久方於松平右近將監武元改稱松平又三郎忠浩同五年乙亥七月二十七日有

命島津淡路守久柄代我造西尾隱岐守忠尚第御老中列居忠尚下

公命賜重年遺領輪臺日錄

寶曆五年乙亥七月廿七日世嗣○同八年戊寅六月十三日從四位下少將ヲ叙任を薩摩守重豪と稱を○明和元年甲申十一月十三日從四位上中將に轉任○天明七年丁未正

月廿九日公務を譲らん事ヲ請ふ即此日報可せらる翌晦日上總介と改稱あらせらる以上史館日錄不據○寛政十

二年乙亥十一月十四日總髮を請ひ榮翁公と御號を改南山公ハ明和年よりの御號なり○文化元年甲子五月二日剃髮○天保二年辛卯正月十九日從三位ヲ叙

俗語考の起草 第二條

明和四年丁亥薩隅西南海ハ唐山の商船肥前長崎一來往此鍼路ふれば或は年毎小其瀬海に漂到を故にいよより其沿海の地に譯士を置きて常に海外清國の音韻を學しめて事を判せしむ 公嘗てよ里長崎の唐山譯士小

第二條

便して漳福の俗語をつとの其音韻を質し和釋を附して其書と著さん事を慮り給ふおとし其起草を命せらる尊慮ハ左に如し

余好華音粗通其音故燕居無事之間常與侍臣等互談話以華音也然唐話多端不暇曲通遍辨而枚舉惟蒐輯所記若干言以為卷名曰南山俗語考素非為他人置是座右以自備遺忘耳

明和丁亥仲冬南山主人識

文化九年書成て木に忍りし

造士館演武館犬追物場を創建 第三條

安永二年癸巳是歲造士館及び演武館を創建を是より先
に大隅守光久公府學校建むと欲し有司に命じて其事を議するに果さざりて逃し給ふ初め薩の僧文之ある者程朱の學校唱ひ其徒如竹にいたり能其説を傳ふこれより往々其業を受るものあり因て四方に儒官一來往せしめ専ら程朱の學を宗とし以て郷里に教授せしむ然れともいさし學校をらば故にこの舉あり其府學を名づけて造士館と云是 寛陽公の御志を御つぎ遊ばさるる形至此に於て學規數十條をつくり藩中に布告あはばされたりよし是より先に犬追物を講する者往々空濶に地を

第三條

於て之いまだ定あし演武館を建ふ及ひて弓馬鎗劍各局あり因てまた犬追物を爰に置り 史館日録

伊勢貞丈犬追物類鏡序説云笠掛流鎗馬犬追物ハ馬上の弓ヲ習と形り是を馬上のつ物と云ふのつ物此中に笠掛流鎗馬ハ馬豎さほまの馳セく射ふ的もまた動さぬもの形り犬追物ハ豎さまにも横さまも左にも右も前も後にも速くも遅くも犬のはしほま隨ひて追射ふ事なれば軍陣の爲にハ殊ニ勝れて能き習ハしどかし其頭書云源順倭名鈔に後漢書の馳射此二字を出して今按むる俗に云於オム牟毛乃以流ノイと注

したりおむものハ追物なり順の項にハいまだ犬追物なり牛追物ハ河原に犬追物此はトめを尋ふに騎射秘抄此序に犬追物ハ御射の簡要馳逐の妙術あり然間鎌倉右大臣家の御時權輿之とあり志あれば實朝公の時始まるぬり此事東鑑ふえび記に漏るぬるにやあらん或 近衛院の御宇に玉藻といひ女化しとる狐と獵らむ爲に三浦介犬を射て試しよりはトまはといふ 前後略を。犬追物類鏡六卷 臣槃 謹くおとふに 吾薩ハ故國おしていおしより武を顯モハらよして義ニ強き事は世皆しる處なり今時に方